

太安万侶の聖地を訪う スケジュール

9月12日(水)

奈良・人と自然の会
歴史文化クラブ

- | | | |
|--------------------|-------|------------------|
| ① 集合 近鉄奈良駅 行基前 | 9:00 | (参加者予定 28人 満席) |
| 中小企業会館前にて バス乗車 | 9:10 | (挨拶 本日の予定) |
| (生駒交通 貸切バス 利用) | | (解説 : 太安万侶、多神社) |
| ② 太安万侶墓 着 | 9:40 | |
| 同 出発 | 10:10 | (解説 : 光仁天皇、志貴皇子) |
| ③ 光仁天皇御陵 着 | 10:20 | |
| 同 出発 | 10:40 | (解説 : 北浦定政) |
| ④ 春日宮天皇陵 着 | 10:50 | |
| 同 出発 | 11:00 | (解説 : 唐古・鍵遺跡) |
| ⑤ 唐古・鍵遺跡 着 | 11:40 | |
| ⑥ 考古学ミュージアム 着 《昼食》 | 12:00 | |
| 同 出発 | 12:40 | |
| ⑦ 多神社 着 | 12:50 | |
| 同 出発 | 13:20 | |
| ⑧ 橿原考古学研究所 博物館 着 | 14:00 | (解説 博物館説明員) |
| 同 出発 | 15:30 | |
| ⑨ 近鉄奈良 帰着・解散 (予定) | 16:30 | |

連絡先 古川 祐司 TEL 0742-44-8621



臣安万侶言す

しんやすまろまを

格調高き名文が語り出す



訂正古訓古事記
明治3(1870)年刊
(奈良県立図書館蔵)

和銅五年(712年)正月二十八日。撰録者・太安万侶により、上中下三巻からなる「古事記」が完成し、献上されたことが、その序文に記される。

伊邪那岐神・伊邪那美神の男女二神が現れ、万物の生みの親となられたのです。

序文冒頭で安万侶は、およそ次のように述べている。

つづいて序文は、「古事記」に記される物語のあらましを語る。伊邪那岐命・伊邪那美命の黄泉の国での物語。

元明天皇の臣下である安万侶がここに奏上いたします。

遠い昔、すべてのものの形が定か

天照大御神、月読命ら神々の誕生。天照大御神の天の岩屋戸隠れ。八俣の大蛇と須佐之男命の戦い。歴代天皇の祖神や、さらなる神々の誕生。

ではなかった宇宙の初めのこと。

ある時、天と地が二つに分かれ、

天之御中主神・高御産巢日神・神産巢日神の三柱の神様が出現されました。

次いで、陰と陽とが別になり、

天照大御神の孫である邇邇杵命の天孫降臨。そして、神倭伊波礼毘古命(神武)

天皇)は、はるばる東への旅路の途中、荒ぶる神が化身した熊と遭遇するも、神剣によつて、それを退けた。行く先々で、ユニークな人々と出会い、大きな鳥の導きによつて目的地にたどり着いた。

御真木入日子印惠命(崇神天皇)は、あまたの神々を崇敬し賢君と伝えられた。大雀命(仁徳天皇)は、民家の煙が立ち上る様を見て課税を減らすなど、人民を慈しむ政治を行なったことから聖帝と今に伝えられる。

そして若帯日子天皇(成務天皇)、男浅津間若子宿禰命(允恭天皇)の治績を記し、いつの時代でも、いにしえのことがらを明らかにすること

で今を顧みてきたのだと述べ、いにしえの伝えの意義を語る。続く序文第二・三段においては、天武天皇による「古事記」へとつながる史書編纂企画の開始から太安万侶が稗田阿礼と共に成し遂げた「古事記」撰録について記し、「併せて三巻に録して、謹みて献上る。臣安万侶、誠惶誠恐、頓首頓首」と締めくくる。

平城宮の正門だった朱雀門。門の前では、元旦や外国使節の送り迎えの際に儀式が行われていたという。この門からまっすぐ、南にのびていたのが朱雀大路。まさしく平城宮跡のメインストリートだった





縦29.1㌢、横6.1㌢ 文化庁蔵

「太安万侶墓誌」 (723年)

歴史に名残す男美辞なき輝き

厚さ1ミリの薄い銅板を短冊形に切り、表側に鑿彫りで銘文が打ち刻まれている。今に伝わる日本最古の書物「古事記」の撰録者、太安万侶の墓誌だ。

左京四條四坊從四位下勳五等太朝臣安萬侶以癸亥年七月六日卒之 養老七年十二月十五日乙巳

銘文は2行のみ。安万侶の居住地(左京四條四坊)や位階勳等(從四位下勳五等)、没年(癸亥年)など計41字。裏面に銘はなく、表面から打ち込んだ文字が浮き出ている。

墓誌とは、故人の姓名や位階、業績、没年を石や金

属に刻んで墓に納めたもの。中国の隋・唐代に隆盛する。日本では7世紀末から8世紀の墓誌が16点現存するが、中でも安万侶の墓誌は鍍金や文様といった装飾がなく、銘文に美辞もない簡潔なつくりだ。

墓は33年前、平城京から7㌢離れた奈良市此瀬町の茶畑で偶然見つかった。もはや古墳を造る時代ではなく、中級貴族といえど墓は簡素だ。それでも古墳時代の木棺と同じコウヤマキ材が使われ、骨を納めた木櫃の中には貴重な天然の真珠玉が4点あった。火を受けておらず、火葬後に添えられたらしい。その輝きが、安万侶の偉業と重なるのである。(大脇和明)

春日天皇（信貴皇子）について

信貴皇子（施基皇子、志紀皇子とも書きます）天智天皇の第七皇子で母は越道君伊羅都売こしのみちのきみいらつめです。672年の壬申の乱後、天智系である信貴皇子は皇位とは無縁となり、好きな和歌の道に生きた人です。

万葉集卷八―一四一八

石いわばしる 垂水たるみの上の さ蕨わらびの 萌もえ出でずる春はるになりなりにけるかも

信貴皇子は靈龜2年（716年）に亡くなり田原西陵に葬られます。この皇子の六男に白壁王という方が居られました。称徳天皇の崩御で天武系の皇統が途絶えてしまい、この白壁王が擁立され光仁天皇として即位しました。この時六十二歳と高齢でしたがこれが現在まで続く天皇家の皇統になります。従って現在の皇室は天智系となります。子の白壁王が即位したので信貴皇子は春日宮天皇と諡名おくりなされました。田原に葬られたので田原天皇とも呼ばれます。

信貴皇子と白壁王は皇位に無縁な位置にいたため、皇位継承争いには巻き込まれませんでしたが、光仁天皇の後の桓武天皇即位については多くの血が流されました。白壁王には正妻である井上内親王いのえ（聖武天皇の娘）と他戸親王おきへがあり、即位後はそれぞれ皇后と皇太子に立てられました。しかし、光仁天皇を呪詛したとして捕らえられ幽閉後薨去しました。そのため、渡来系王族出身の高野新笠たかののにいがきを母とする山部王が立太子し、桓武天皇となります。

この呪詛事件は不自然であり藤原氏の式家と南家の権力争いによる内紛と山部王の陰謀があつたとする説があります。即位した桓武天皇は実弟の早良親王さわらを一度は皇太子にしましたが、藤原種継暗殺に連座したとして淡路に流し、早良親王は無実を訴え憤死しました。平安京に遷都した桓武天皇は天変地異や疫病に悩まされ、これらは怨霊の祟りであるとし、井上皇后、他部親王、早良親王の名誉を回復し、早良親王には特に崇道天皇と諡名し御霊神社に祭りました。

奈良町には御霊神社ごりょうじやうがあり、京都にも早良親王を祭る崇道神社があります。いずれも怨霊の祟りを恐れ怨霊封じを願った神社です。

メモ 唐古・鍵遺跡—弥生時代の代表的遺跡（BC 3～4世紀からAD 3世紀）

1、概要

田原本町大字唐古から鍵にかけて所在する弥生時代の環濠集落遺跡である。奈良盆地のほぼ中央、標高48～51メートルの沖積地に立地する。1936・7年、国道敷設用採土に伴い唐古池底の調査がおこなわれた。この時に出土した土器や木製品等は弥生時代の総合的な認識をもたらし、畿内の土器編年の枠組みを作った。その後、発掘調査は1977年に再開され、2009年3月までに106次に達した。長年にわたる調査が行われた結果、この遺跡は日本を代表する大環濠集落であることが明らかになり、平成11年(1999)に国の史跡に指定された。

集落は、多条環濠を有し、大型建物や高床・竪穴住居、木器貯蔵穴、井戸、区画溝などの遺構で構成されている。大環濠（内濠）は直径400メートルの範囲を囲み、外濠を含めた全体では約42万平方メートルの面積を占める。出土遺物は土器、農工具・容器などの木製品、石鏃や石包丁などの石器、骨角器、卜骨などの祭祀遺物、炭化米、種子、獣骨類など多種多様な遺物、さらには銅鐸の鋳型などの鋳造関係遺物、褐鉄鉾容器に入ったヒスイ勾玉、楼閣の描かれた絵画土器など特殊な遺物も出土している。

平成4年(1992)に、楼閣と思われる絵が描かれた土器片が遺跡の南部から出土し、2年後の平成6年6月24日、2つの土器片に描かれた絵をもとに楼閣が復元された。それが現在唐古池の南西隅に建っている重層建築である。

2、奈良盆地の中核的存在

この集落は、弥生時代前期（紀元前3～4世紀）から古墳時代初期（紀元後3世紀の終わり）まで約600年以上も同じ場所で継続して存在したことに大きな特色がある。調査にあたった藤田三郎氏は、遺跡の遺構、木器、石器、青銅器、ガラス器等の製造跡や、広域な物流を示す各地の土器から、当遺跡は、その最盛期において、奈良盆地に10か所以上もあった有力な環濠集落の「中核的な役割を果たし、奈良盆地の弥生集落の盟主的な存在であった」とされる。

3、環濠集落の始まりと発展

縄文時代の晩期から弥生時代の初期にかけて、地球が寒冷化して海位が下がった。（弥生小海退）その結果、湖水だった奈良盆地が干上がり、稲作に適した土地が出現した。稲作文化の普及により、奈良盆地の各地に弥生ムラが誕生した。

弥生時代の前期、唐古・鍵遺となる最初の集落もこの沖積地に営まれた。初期の集落は3つのムラに分かれており、それぞれのムラが環濠をめぐらしていたことが判明している。

弥生時代中期になると大環濠が作られ、3か所のムラが一つに統合され、大環濠の外側に幅5m前後の環濠が4つから5つ巡らされた。この時期、唐古・鍵遺跡は弥生時代最大級の集落に成長した。

4、唐古・鍵遺跡から纏向遺跡へ

唐古・鍵遺跡は、弥生中期後半には洪水で一旦埋没するが、弥生時代後期にはムラが再建される。

その後、集落の規模は徐々に縮小し、古墳時代前期には、ムラは元の3カ所に分立し、古墳時代中期に完全に消滅する。

弥生から古墳時代への移行期の3世紀初頭に突如として5キロ南の地に、纏向遺跡が出現する。計画性ある遺構、出土品の広域性、東西軸に設置された各種大型建物の遺構、祭祀坑跡の発見、周辺には石塚古墳、箸中古墳などの初期の前方後円墳がること、などから、女王卑弥呼の邪馬台国の都の候補地として話題を呼んでいる。石野博信氏は、近くにあった唐古・鍵遺の多くは、この新しく出現した政権中枢センターへ移行して行ったのではないかとされる。なお、巻向遺跡は4世紀初頭突如として消滅し、ヤマト王権へと推移していく。

《「唐古・鍵遺跡 奈良盆地の弥生大環濠集落」 藤田三郎著 より》

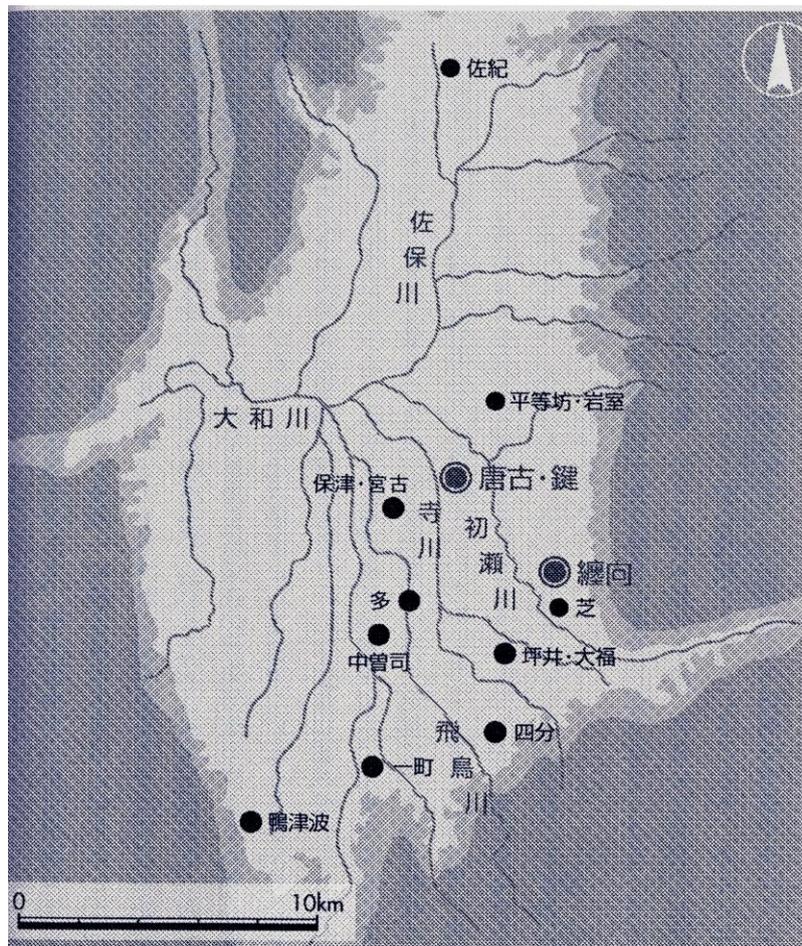


図10 奈良盆地の拠点集落分布図

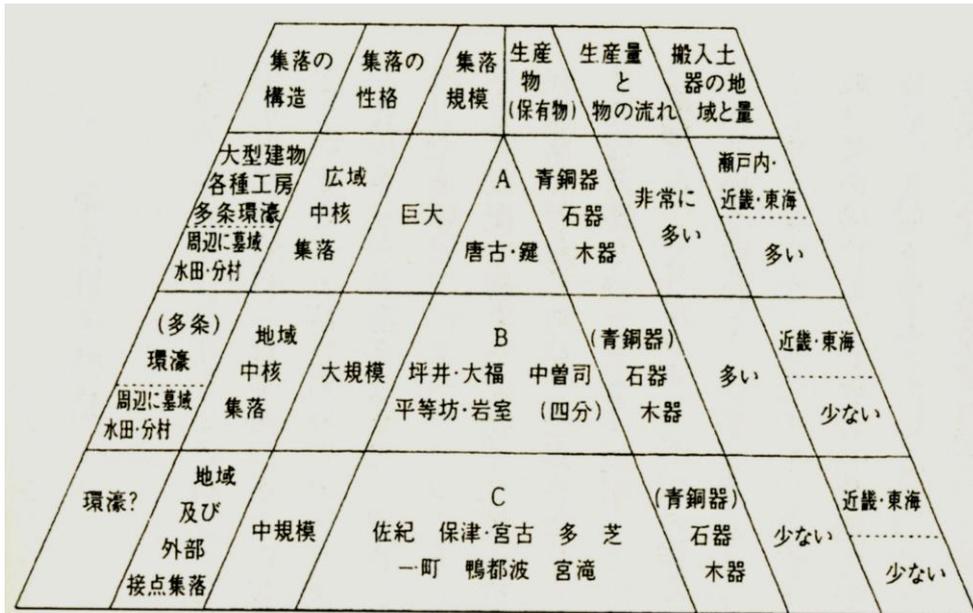


図47 奈良盆地の拠点集落の類型

参考図書 : 「唐古・鍵遺跡の考古学」 田原本町教育委員会 編 学生社
「唐古・鍵遺跡 奈良盆地の弥生大環濠集落」 藤田三郎 同成社
「邪馬台国と纏向遺跡」 奈良県立情報図書館編 上田正昭ほか 学生社 等

(資料収集 古川祐司)

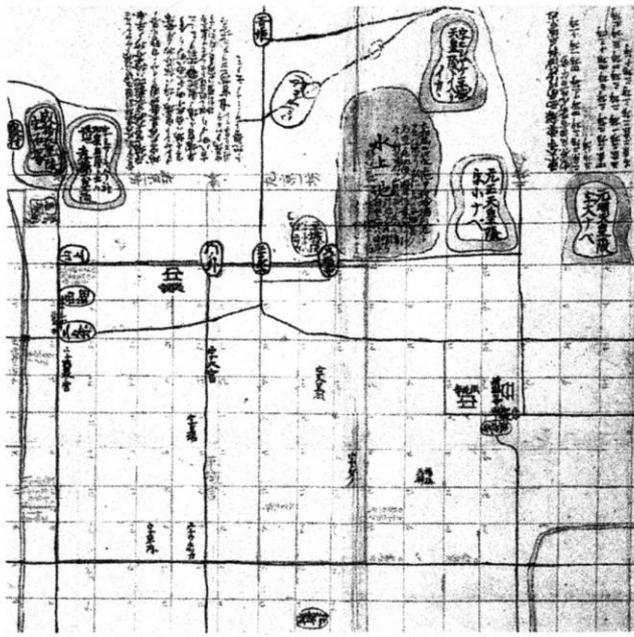
北浦定政

出典

岩本 次郎「北浦定政 平城京を紙の上に建つ」(週刊朝日百科『皇室の名宝⑦』、1999年6月)

「北浦定政」(『日本歴史大事典1』小学館、2000年)

津久井清影『聖蹟図志』1865年(但し、羽曳野 日本書紀を読む会資料集⑥、1986年による。)



平城宮大内裏跡坪割之図(部分) 平城宮跡と法華寺の周辺。現在は消えた地名が多く記されている 写真/佃幹雄 奈良国立文化財研究所許可

北浦定政

きたうらさだまさき (一八一七—七二)

江戸後期(幕末)の国学者。奈良市古市町において、藤堂藩の掛屋の家に出生。農民の出とする説は誤り。一六歳で藤堂藩古市城奉行所に銀札方御雇手代として出仕。和歌、国学を本居内遠らに学ぶかたわら、勤王思想から山陵研究を志して、『打墨繩』を刊行、さらに平城京条坊と大和国条里の地割を文献と測量により究明して、『平城宮大内裏跡坪割之図』『大和国古班田坪割略図』等を著し、藩士となり、光仁帝陵等の修補にも尽力。

↓本居内遠

〈岩本次郎〉

『奈良国立文化財研究所編・刊『平城宮跡保存の先覚者たち—北浦定政を中心として』(一九七六)同『北浦定政関係資料』(一九九七)

大正七年(一九一八)十一月二十二日、帝室博物館総長兼圖書頭鶴外森林太郎は正倉院開扉の折の合間をみて古市町の定政の墓に詣でている。なかなか定政賢しいにしへの奈良の都を紙の上に建つ
(講外『奈良五十首』)



廣岡ヨリ委改華田
原山中谷在當初
陵山モ見リ高カリシ
近代堀崩シ巡リテ
埋田畑関キシモト
見エタリ

延暦時代陵製考附圖
一田原東陵 光仁天皇
在大和國添上郡田原郷
日笠村宇塚之本

辞世一首
こしかたのくひのあまりにゆく末の
はてなき夢をみるかくるしさ



北浦定政像と辞世 定政は戒名も自分で用意していた。その死の直後、辞世を詠む姿を岡本桃里が描いたものか 北浦和子藏

おおいますやしりつひこじんじや
多坐弥志理都比古神社 (多神社)

祭神 神武天皇・神八井耳命・神沼河耳命・姫御神・太安万侶

由緒 社伝によると、神武天皇の皇子神八井耳命がこの里に来られ、…我、天神地祇を祀る…という由緒をもつ。平安時代の『延喜式』にも名がみえる大和でも屈指の大社である。神八井耳命を始祖とする多氏によって祀られ、中世には国民である十市氏によって支えられた。また、本神社の南には、古事記の撰録にあたった太安万侶を祀る小杜神社や皇子神命神社、姫皇子命神社、子部神社、屋就命神社の若宮がある。

本殿は、東西に一間社の春日造が並ぶ四殿配祀の形式をとる。江戸時代中頃の建築様式をよく残すもので、奈良県の指定文化財になっている。

なお、本地は弥生時代の集落遺跡として著名である。

一境内案内より一

古事記 中つ巻 (神武天皇)

神八井耳命は、天の下治らしめしき。おほよそ此の神倭伊波礼毗古天皇、御年壹佰参拾漆歳。御陵は畝火山の北の方白檮の尾の上に在り。

お意富(多)臣

故天皇崩りましし後に、其の庶兄当芸志美々命、其の適后伊湊余理比売に娶へる時に、其の三の弟を殺さむとして、謀る間に、其の御祖伊湊余理比売、患へ苦しびて、歌を以ち其の御子等に知らしむ。歌ひて曰く、
狭韋河よ 雲起ちわたり
畝火山 木の葉さやぎぬ
風吹かむとす
また歌ひて曰く、
畝火山 昼は雲とる
夕されば 風吹かむとそ
木の葉さやげる
是に其の御子聞き知りて驚き、当芸志美美を殺さむとする時に、神沼河耳命、其の兄神八井耳命に白さく、「なね、汝命、兵を持ち入りて、当芸志美美を殺したまへ」とまをす。故兵を持ち、入りて殺さむとする時に、手足わななきてえ殺さず。故尔して其の弟神沼河耳命、其の兄の持てる兵を乞ひ取り、入りて、当芸志美美を殺したまふ。故また其の御名を称へて、建沼河耳命と謂ふ。
尔して神八井耳命、弟建沼河耳命に譲りて曰さく、「吾は仇を殺すこと能はず。汝命既に仇を殺すことを得つ。故吾は兄にあれども、上と為るべくあらず。是を以ち汝命、上と為り、天の下治らしめせ。僕は汝命を扶け、忌人と為りて仕へ奉らむ」とまをす。
故其の日子八井命は、茨田連、手島連が祖。神八井耳命は、意富臣。小子部連、坂合部連、火君、大分君、阿蘇君、筑紫の三家連、雀部臣、雀部。造、小長谷造、都祁直、伊余の国造、科野の国造、道の奥の石城の国造。常道の仲国造、長狭国造、伊勢の船木直、尾張の丹波臣、島田臣等が祖なり。神沼河耳命は天の下治らしめしき。

[歌謡 20・21] 102

(当芸志美々命の変)

(歌謡番号二〇)

注1 神八井耳命、神沼河耳命は神武天皇の皇子、母は母伊湊余理比売(三輪大物主の子)で太后当芸志美美命は、神八井耳命たちの庶兄、母は阿比良比売(小碓の君の妹 鹿児島県加世田市)

小杜神社

多坐弥志理都比古神社の摂社で、同社南東に鎮座。祭神は太安万侶。旧村社。鎮座地の小字を木ノ下というため木下社ともいう。「延喜式」神名帳十市郡の大(おお)社四皇子神の一「小杜神命神社」に比定され、多神社注進状(五郡神社記)には「樹森神社瓊玉戈神命」とみえる。

明治四四年(一九一一)に古事記撰上二千百年祭が執行され、昭和一五年(一九四〇)の皇紀二千六百年祭に境内が整備された。学問の神として崇敬される。東方に太安万侶の墓と伝える小円墳がある。